母娘 2 世代間における意識の検討 (2)

— 親の介護および扶養義務感について —

○河野理恵・小野寺敦子

(目白大学人間学部)

キーワード: 母娘, 介護と扶養義務

Similarities and differences between daughters and their mothers (2)

-Views of care and support obligation for parents-

Rie KAWANO and Atsuko ONODERA

(Meiji University)

Key words: daughters and their mothers, care and support obligation

【目的】

従来の家制度の下では、高齢者の介護や扶養は長男やその嫁に依存することが多かった。しかし、2003 年の高齢者介護に関する意識調査によると、多くの高齢女性は「娘」からの介護を期待する傾向が見受けられる。また最近、「仲良し母娘」が話題になり、娘の結婚後も実母と娘が頻繁に一緒に買い物に出かけたり、食事をしたりしていることが指摘され、母娘の情緒的親密性が続くことが多くなっているようである。このように近年、母親と娘の結びつきは強くなっているように思われるが、娘が子育てをする時期にある場合、娘は親の介護や扶養をどのように考えているのだろうか。一方、母親は子育て中の娘に対して、自分の介護や扶養などに何を期待しているのだろうか。本研究では、子育て中の娘とその母親という 2 世代間において、介護や扶養に関する意識を明らかにすることを目的とする。

【方法】

調査対象者: 首都圏に在住し、幼稚園と保育園に通う子どもをもつ母親（以後、娘）360 人とその実母 71 人。娘の平均年齢は 37.81 歳 (SD=4.46) であり、実母の平均年齢は 65.63 歳 (SD=6.44) であった。娘がもつ子どもの人数は、1 人が 103 人 (28.6%)、2 人が 201 人 (55.8%)、3 人が 45 人 (12.5%)、4 人が 9 人 (2.5%)、不明が 2 名 (0.6%) であった。

調査時期: 2015 年 3 月。

調査方法: 幼稚園や保育園において、娘に対して質問紙を配布し、内容を記入後に郵送してもらった。その際、実母に対する質問紙郵送の可否を問い、可能な場合には実母の住所と氏名を記載してもらった。その後、実母に対して質問紙を郵送し、内容を記入後に郵送してもらった。

調査内容: 娘に対しては、(a)食ライフスタイル尺度 30 項目(b)エゴレジリエンス尺度 14 項目(c)性役割観項目 5 項目(d) 子育ての制約感項目 9 項目(e)娘から見た父親/母親との関係性項目 23 項目(f)子どもへの養育態度項目 14 項目(g)子どもへの期待項目 15 項目(h)高齢者のイメージを問う項目 12 項目(i)現在の体調と生活満足感項目 14 項目(j)親や高齢者に関する質問項目 10 項目(k)老親扶養義務感に関する項目 8 項目(l)個人属性の記入を求めた。回答は、(a)～(i) と (k)については 4 件法であった。また(j)については 4 件法が 6 項目、5 件法が 2 項目、7 件法が 2 項目であった。実母に対しては、上記(a)～(e) (h) (k) (l)、最近の生活を尋ねる項目を 4 件法で 31 項目設定した。本研究では、(k)老親扶養義務感に関する項目 8 項目と(j)親や高齢者に関する質問項目 10 項目を分析の対象とした。

【結果】

1. 老親扶養義務感: 4 件法で回答を求めた老親扶養義務感に関する 8 項目を「非常にそう思う」を 4 点、「ややそう思う」を 3 点、「あまりそう思わない」を 2 点、「まったくそう思わない」を 1 点として得点化した。娘と実母の得点を t 検定に

より比較したところ、8 項目すべてにおいて 1%水準で有意差が見られ、項目 1～7 においては、実母よりも娘の得点が高かった。また、項目 8 においては、娘よりも実母の得点が高かった。すなわち実母は娘よりも、老後において親を金銭的に援助することや介護をすることを当然だと思っていなく、介護を子どもの役割と認識していないことを意味している。t 検定の結果を Table 1 に示す。

Table 1 老親扶養義務感の項目における t 検定の結果

	娘		実母		t値
	M	SD	M	SD	
1 老年期の親を経済的に援助するのは子どもとして当然である	2.90	.71	1.56	.63	14.79**
2 親の介護が必要になったら介護するのは子どもとして当然である	2.99	.68	1.83	.76	11.95**
3 子どもは、老年期の親と共に過ごす時間をもつべきである	2.86	.71	2.10	.78	8.00**
4 子どもは老年期の親が日常生活に困らないように、金銭的援助をするべきである	2.73	.66	1.62	.62	12.95**
5 老年期の親の介護をしないのは、子どもとしての役割を怠っている	2.36	.69	1.73	.70	6.95**
6 子どもは、時には老年期の親に旅行や趣味の活動の機会を用意するべきだと思う	2.70	.75	1.72	.76	10.05**
7 老年期の親が介護を子どもに望むことは当然だと思う	2.59	.76	1.86	.82	7.28**
8 老年期の親の介護は必ずしも子どもの役割ではないと思う	2.70	.68	3.14	.82	-4.81**

**p < .01

2. 親や高齢者に対する意識: 娘が親や高齢者に対してどのような意識を抱いているのかを明確にするために、回答を求めた 10 項目を集計した。その結果、「家庭で子どもが親を扶養する形式についてどう思いますか」という質問において、「仕方がないと思う」との回答が 157 人 (58.7%) と最も多かった。また、「高齢者は一般的に優遇されていると思いますか」という質問において、「あまりそう思わない」との回答が 169 人 (47.5%) で最も多かった。

【考察】

老親扶養義務感の分析結果より、実母は子育て中の娘に対して、親を介護や扶養しようという義務感をもたなくてもよいと認識していることが明らかになった。近年、母親は娘に介護などを希望する傾向が見られているが、子育て中の娘をもつ母親は、現在の娘の家庭を重視し、子育てを最優先に考え、自分の将来の支援を担う必要はないと思っているのではないかと考えられる。

一方、親や高齢者に対する意識の分析結果より、親を家庭で扶養する形式は仕方がないことであると娘の半数近くが受け入れていることが明らかになった。このことから、娘は将来的に何らかの形で親の介護や扶養を視野に入れているのではないかと推測された。

付記) 本研究は、2014 年度科学研究費助事業 (基盤研究 (C)、課題番号 25380889) の助成金交付を受けて実施された。